**羅生門**

**芥川龍之介**

　ある日の暮方の事である。一人のが、の下で雨やみを待っていた。  
　広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々のげた、大きなに、が一匹とまっている。羅生門が、にある以上は、この男のほかにも、雨やみをするやが、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。  
　何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とかとか火事とか饑饉とか云うがつづいて起った。そこでのさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打砕いて、そのがついたり、金銀のがついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、のに売っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、がむ。が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。  
　その代りまたがどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高いのまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それがをまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、みに来るのである。――もっとも今日は、が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉のが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺のの尻を据えて、右の頬に出来た、大きなを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。  
　作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならずしていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。のりからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当りの暮しをどうにかしようとして――云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。  
　雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出したの先に、重たくうす暗い雲を支えている。  
　どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいるはない。選んでいれば、の下か、道ばたの土の上で、をするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまうばかりである。選ばないとすれば――下人の考えは、何度も同じ道をしたに、やっとこの局所へした。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。  
　下人は、大きなをして、それから、そうに立上った。夕冷えのする京都は、もうが欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。の柱にとまっていたも、もうどこかへ行ってしまった。  
　下人は、をちぢめながら、のに重ねた、紺のの肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風ののない、人目にかかるのない、一晩楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗ったが眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげたのがらないように気をつけながら、をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。  
　それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上のを窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤くを持ったのある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高をっていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々にの巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。  
　下人は、のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、にしながら、頸を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内をいて見た。  
　見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかのが、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土をねて造った人形のように、口をいたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久にの如く黙っていた。  
　は、それらの死骸のした臭気に思わず、鼻をった。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。  
　下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中にっている人間を見た。の着物を着た、背の低い、せた、の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松のを持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。  
　下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、はをするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子のをとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。  
　その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。――いや、この老婆に対すると云っては、があるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、をするかになるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松ののように、勢いよく燃え上り出していたのである。  
　下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さっきまで自分が、盗人になる気でいた事なぞは、とうに忘れていたのである。  
　そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうしての太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云うまでもない。  
　老婆は、一目下人を見ると、まるでにでもかれたように、飛び上った。  
「おのれ、どこへ行く。」  
　下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手をいで、こうった。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへじ倒した。丁度、の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。  
「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」  
　下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀のを払って、白いの色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、がの外へ出そうになるほど、見開いて、唖のようにく黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。  
「はの庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前にをかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだか、それを己に話しさえすればいいのだ。」  
　すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。の赤くなった、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖ったの動いているのが見える。その時、その喉から、の啼くような声が、ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。  
「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、にしようと思うたのじゃ。」  
　下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかなと一しょに、心の中へはいって来た。すると、そのが、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。  
「成程な、の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇をばかりずつに切って干したのを、だと云うて、の陣へ売りにんだわ。にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいた事であろ。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさずに買っていたそうな。わしは、この女のした事が悪いとは思うていぬ。せねば、饑死をするのじゃて、仕方がなくした事であろ。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、饑死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。」  
　老婆は、大体こんな意味の事を云った。  
　下人は、太刀をにおさめて、その太刀のを左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きなを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさっきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、饑死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、饑死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。  
「きっと、そうか。」  
　老婆の話がると、下人はるような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をから離して、老婆のをつかみながら、噛みつくようにこう云った。  
「では、がをしようと恨むまいな。己もそうしなければ、饑死をする体なのだ。」  
　下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとったの着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。  
　しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短いをにして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、たる夜があるばかりである。  
　下人のは、誰も知らない。

テスト

オートシェイプ内の文字のテスト